

民国期中国の女性洋画家関紫蘭の芸術観再考—陳抱一との関わりから

九州大学人文科学府 武 夢茹

民国期中国で活動した女性画家およそ 20 名弱については、現存作品が比較的多い潘玉良を例外として、研究が進んでいない現状がある。日本留学経験を持ち、フォーヴィスム風の風景画や静物画、女性像を描いた関紫蘭(グァン・ズーラン、1903-1985)も、第一世代の女性洋画家として中国近代美術史において重要であるにもかかわらず、本国中国でも、また日本でも、十分な研究がなされているとは言い難い。発表者は、『デアアルテ』(九州藝術学会、2016)において、関紫蘭の代表作《少女像》(1929)の詳細な分析を行い、同作成立の背景に人格の向上と内面の描出を目指す制作理念があったことに言及した。そこで本発表では、関紫蘭の人格主義的な芸術観が形成された経緯を明らかにし、その形成に関わる社会的背景について考察したい。

関紫蘭は、1926年8月28日付『申報』で、芸術活動を通して人格の修養を目指すことを述べている。翌年中華藝術大学を卒業、日本を訪れ神戸で個展を開催し、第14回二科展にも入選した彼女は、日中メディアの注目を集めた。帰国後、1930年には上海華安大厦で個展を開催し、その会場写真や展覧会評が連日にわたって新聞紙面を賑わせた。1910年代から30年代初頭、上海を中心に美術学校や展覧会など近代的な美術制度が確立していった時期に、関紫蘭は日中を舞台に第一世代の女性洋画家として活躍したのであった。そのことを踏まえるならば、上述した『申報』の文章は、「近代」的な画家としての門出に際して関紫蘭が発表したものであり、彼女の制作活動の根底をなす洋画家としての精神が刻まれているようにも思われる。

このような関紫蘭の人格主義的な芸術観の形成に関わった人物として、神州女学校と中華藝術大学時代に師事した洋画家陳抱一の存在に注目する。東京美術学校で学んだ経験をもつ陳抱一は、油彩画の技法、鑑賞法などの基礎から、東西美術史の幅広い知識を美術学校や研究団体で教える傍ら、活字メディアを通じて洋画の普及に尽力する民国期の上海洋画壇を牽引する存在であった。関紫蘭が師事していた1920年代にかけての陳抱一の言説を紐解くと、彼が精神性を重視する芸術観を抱き、当時の都市化にともなう様々な社会問題を、芸術運動の実践を通して解決しようとしていたことが伺える。その思想は、彼の中華藝術大学設立を支援した中華民国初代教育総長の蔡元培が1912年に提唱した「美感教育」に呼応するものであった。「美感教育」は、宗教に取って代わる芸術による精神の修養を重視した教育であり、社会貢献を担う健全な精神をもつ青少年の育成を目指した。建国以来、西洋列強による植民地支配を逃れるため、民国政府は近代化を推し進め、教育を通して自国民のナショナル・アイデンティティを構築していくこととなる。このような政治社会的潮流の中で、陳抱一から学んだ人格主義的な芸術観が、関紫蘭の中で国民としての意識と深く結びついていたことを明らかにする。